

梅



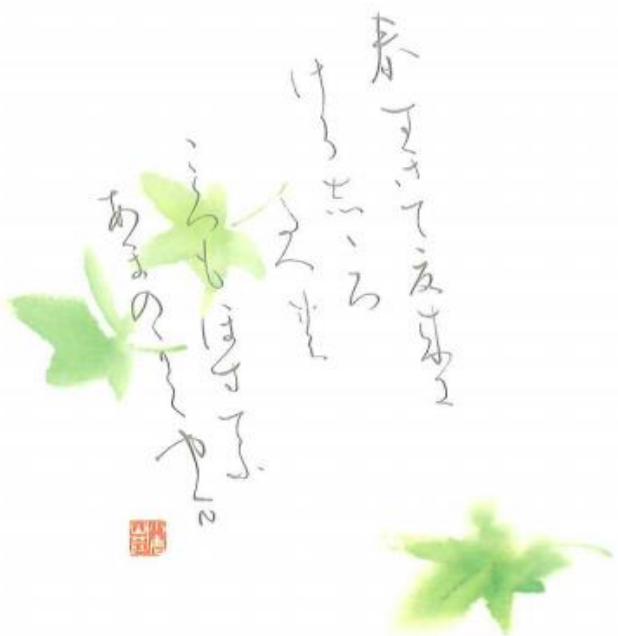
人はいさ心も知らずふるさとには  
花ぞ昔の香にほひける  
〔第三十五番 紀貫之〕

桜



花の色はうつりにけりないたづらに  
わが身世にふるながめせしまに  
〔第九番 小野小町〕

青紅葉



春すぎて夏来にけらし白妙の  
衣はすてふ天の香具山  
〔第二番 持統天皇〕

紫陽花



夏  
の  
夜  
は  
ま  
だ  
宵  
な  
が  
ら  
明  
け  
ぬ  
る  
を  
雲  
の  
い  
づ  
こ  
に  
月  
や  
ど  
る  
ら  
む

清原深養父



夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを  
雲のいづこに月やどるらむ  
〔第三十六番 清原深養父〕

朝顔



ほとときす鳴きつる方をながむれば  
ただ有明の月ぞ残れる  
後徳大寺左大臣



ほとときす鳴きつる方をながむれば  
ただ有明の月ぞ残れる  
〔第八十一番 後徳大寺左大臣〕

萩



萩の秋  
萩の秋  
萩の秋  
萩の秋  
萩の秋



今来むといひしばかりに長月の  
有明の月を待ち出でつるかな  
〔第二十一番 素性法師〕

紅葉



小倉山峰

もみぢ葉  
あまのこ

いづれはるゆき  
ま



小倉山峰のもみぢ葉ころあらは  
今ひとたびのみゆき待たなむ  
(第二十六番 貞信公)

南天



朝ほらけありつきの  
吉野の里にふれる白雪

坂上是則  
吉野の里にふれる白雪



朝ほらけ有明の月とみるまでに  
吉野の里にふれる白雪  
〔第三十一番 坂上是則〕